

チャレンジドでの学びと絆の大切さ

社会福祉学部社会福祉学科 2年 小池 美穂

活動先：NPO 法人 チャレンジド

クラス：岡 多枝子 先生

1. はじめに

私はサービスマーケティングで障害を持った子どもの夏休みの日中一時支援を行っているチャレンジドへこの夏に活動を行った。その中で私が印象に残った活動について述べていく。

2. 印象的だった活動

私が印象的だった活動はウォークラリーである。去年も2日間を使ってキャンプをしていた。私たちも2日間を使って子どもたちと夏の思い出を作ることにした。私たちはまず自分たちでどんな活動をしたいかを話し合い、企画を考えた。そして、その案を職員の方たちへ話してみた。

しかし、案を立てれば立てるほど障害を持った子どもには難しいことやみんな共通で出来ることが少なかった。どんなことをすれば子どもたちにとっても私たちにとってもいい思い出になるのかを考えた時に去年とは違うことをして、普段は出来ないことをこの夏に子どもたちに経験させたいと思い、考えた末に今年は学校を使ってのウォークラリーを行うことにした。ただのウォークラリーではなく、屋台が夏祭りになっている。まず始めに大学のリズム室を使って中学生のボランティアと大学生のボランティアと子どもたちとで交流会を行った。障害を持った子どもたちがボランティアの学生といきなりウォークラリーをするのは難しい部分があるのではということから、まずはみんなで風船を使って風船バレーをしてもらい、残りの時間に自由に子どもたちの好きなことをして遊んでもらった。交流会が終わった所でウォークラリーに入った。このウォークラリーはうちわ作り、かき氷、巨大迷路、チョコバナナ、キーホルダー作り、お菓子詰めを行った。どのブースも子どもにとっても楽しく活動出来ていたり、ボランティアの学生も子どもと一緒に活動出来ていた。ウォークラリー終了後はなかなか子どもたちが遊びを辞めなかったのも、とても気に入ってくれたんだと感じた。学校でのウォークラリーが終了した所で子どもたちとチャレンジドへ戻り、夕飯を私たちと大学生のボランティアで作った。夕飯は焼きそばを作った。子どもたちはおいしいと言って何杯もおかわりをしてくれた。あつという間に無くなったので、私はとても嬉しかったのと残さず食べてくれたことに安心をした。夕飯後は近くの海に行き花火を行った。花火を実際に自分で持ち、楽しんでいる子どもと花火の火をきれいだと言い見ている子どももいた。この花火も子どもだけでなく職員の方も楽しんでくれた。花火終了後はお泊まりをする子どもだけチャレンジドに残った。私も一緒に子どもと泊った。翌朝に朝ごはんを食べ、親御さんの迎えで子どもが帰って行った。企画を行う前は初めて自分たちが主体となって企画を運営するため不安もあり、楽しみもあった。しかし、このお泊まり会は私たちの力だけではない。職員の方の協力、親御さんの協力があってこそ成功したものである。

3. SLを通しての自分の成長と気づき

私はこの経験を通して障害を持った子どもとのコミュニケーションの取り方について自分たちで企画を計画し運営する力が付いたのとそれを運営するのは私たちだけでは出来ないことであるということを通して成長と気づきがあった。

まず私はほとんど障害を持った子どもとの関わりが少ないということと自分から話しかけるのがあまりなかった。そのため、初めて日中一時支援として子どもと出会った時に何を話せばいいのか、何をすればいいのかが分からずに子どもの遊ぶ様子を見ていたり、ずっと近くで座っていることが多く、他のメンバーと差がついていた。

しかし、1日の活動が終わった後などに職員の方から声をかけていただいたり、どう接すればいいかなどの疑問をぶつけ、接し方や子ども1人1人の障害について話を聞いた。そこから、少しずつ自分から子どもに声をかけて一緒に遊ぶことが出来るようになった。1人1人障害が違うために関わり方も違うので1人1人に合った関わり方、声のかけ方を学んだ。ただ声をかけるだけでなく、どういう言葉を使うと子どもが理解しやすくなるのか、危ないことをした時になぜそれが危ないのか、言葉を発することの出来ない子どもの動きを見てどんなことをしているのか、どんな遊びが好きなのかを見て判断することが活動を行うごとに自分で出来るようになっていった。初めは担当の子どもだけを見るのに必死だったが、活動を通して担当になった子どもだけでなく、その日に来ている子どもたちともコミュニケーションを取ることが出来た。

今回の夏祭りウォークラリーはほぼ自分たちで企画を考えて運営までやった。私は自分で企画を考えることが苦手と考えたとしても考えて終わりにしていた。

しかし、今回はメンバーが3人もいたこともありみんなで案を出し合っただけでどんな企画をすれば子どもたちがいい思い出となるのか、どんなことが出来るかを考えた。もともと自分たちで何がやりたいかを考えていて、実際に日間賀島に行ったりと企画を進めて考えていたのだが、去年と同じ場所での企画や船の料金などの不安から他のものへ変更した。自分たちでやりたいことが金銭面などで出来ないものが多かった。私は率直に企画を考えて運営することは難しいんだとその時感じた。職員の方のアドバイスなどをもらい、改めて考えて出した企画が夏祭りウォークラリーであった。企画は決まったものの内容がなかなか決まらず準備に取り掛かったのが遅く、前日にお店のブースを作ったり、看板を作ったりとしていた。また、当日にチョコバナナを作った。溶かしたチョコをバナナにつける所までは良かったのだが、チョコのついたバナナを企画時間ギリギリまで冷やし、実際にチョコバナナのブースに出した時にはバナナからチョコが取れていて茶色くなったバナナがあるだけであった。これは味には問題なかったが見た目が良くなく、このブースにウォークラリーに来た子どもはいらないと行って食べない子が多かった。そのため、もっと事前に準備することの大切さ、事前に試す大切さを気づかされた。そして、自分たちで企画を運営し、他の人に指示を出すことができ、私は活動をする前と比べ自分で動くこと・周りに指示して人を動かすことが出来るようになった。

また、この企画は私たちだけでなくボランティアに来てもらった学生の方と一緒に企画を考えて案を出したり、アドバイスをくれた職員の方の力があってこそ出来たものであり、成功したものであるのもので、私だけの力でもないし、メンバーだけの力でもない。色々な人の協力があってこそ出来たものだと考える。

4. 活動を通して見えてきた地域活動や社会活動

チャレンジドは障害当事者と共に学び共に生きるをモットーにしている。そして、自分らしく地域で暮らし続けたいという思いに寄り添って様々なサービスや啓発活動を行っている。実際にチャレンジドでの活動を通して子どもたちが地域に飛び出し色々な経験をすることで、のびのびと生活が出来ているとだと感じた。また、地域の方とも障害を持っているからといって交流を避けるのではなく、地域の方に障害を持っていても一緒に暮らすことは可能なことを知ってもらうためにも外にどんどんと飛び出していた。

しかし、逆にチャレンジドの周りに子どもが遊ぶ所も少なく、地域の方と交流する場所が少なく遠くに行き行って遊ぶことが多かった。そのため、もっと美浜に暮らす障害児が美浜の地で遊び、地域の方と交流する場所を確保すべきだと感じた。場所が増えることで多くの方と交流が出来、子どもにとっても親御さんにとってもいい経験や学びが出来る。